博物館雑誌　第36巻　第1号（通巻53号）97～110ページ 2010年12月

【研究ノート】

トルコの博物館の成立と発展

Approval and development of museum in Turkey

野中　優子※

Yuko NONAKA

はじめに

今まで日本の博物館学の中で日本やヨーロッパ、アメリカの博物館に対しては多くの研究がなされているが、イスラーム地域の博物館についての研究は少ない。イスラーム地域に博物館や博物館学がないわけではなく、日本での研究が進んでいないという印象がある。

イスラーム地域といっても広大である為、様々な文明や国家が治め、多様な民族が共存し、イスラーム的世界帝国と言われたオスマン帝国があったトルコを題材にする。本稿ではトルコの帝国博物館（現・イスタンブール考古学博物館）の成立と展示、国民国家と博物館について考察する。

1．博物館建設以前

1-1 トルコの民族と国の歴史

トルコはヨーロッパとアジアの境に位置する国であり、多様な民族が暮らし、歴史的に様々な国が統治してきた土地である。トルコの地を治めた国は確かなものだけでも、ヒッタイト、フリュギア、リディア、ペルシア、ヘレニズム、ローマ、ビザンツ帝国、セルジューク朝、オスマン帝国、トルコ共和国と多く、トルコの大地の歴史は民族と宗教の興亡の歴史といっても過言ではないだろう。

世界で初めて鉄器を扱ったことで知られるヒッタイト、アレクサンドロス大王の遠征によって領土を拡げたペルシア、ヘレニズム、などオリエントと呼ばれる国々が治めたが、その後ローマが領土を拡げ、東西ローマの分裂によってトルコの大地はビザンツ帝国(東ローマ)が統治している。このローマ、ビザンツ帝国の時代にボスフォラス海峡とマルマラ海、金角湾に囲まれた都市ビザンティオン(B.C.7 世紀頃建設)がコンスタンティノープルと改称されて、首都となった。[1] ビザンツ帝国は堅固な要塞や城壁を持ち繁栄を極めたが、1453年オスマン帝国に首都のコンスタンティノープルを征服され滅亡した。

オスマン帝国は12世紀末、騎馬戦士集団ガーズィーの首領にオスマン1世（在位1299年-1326年）がなった事から始まる。遊牧民族が君候国になり、徐々に領土を拡げ、7代スルタンのメフ

※ 國學院大学大学院

メット２世（在位 1444 年-1446 年、1451 年-1481 年）がビザンツ帝国の首都コンスタンティノープルを陥落させることによってビザンツ帝国を滅ぼし、９代セリム１世（在位 1512 年-1520 年）はイスラームの聖地メッカとメディナを保護下に置きヨーロッパとアジアにまたがる広大な領土を持つイスラーム的世界帝国を作り上げた。

オスマン帝国の君主と帝国の中枢を担う者は、トルコ語を話すトルコ人（テュルク）で、その圧倒的多数はムスリム[2]であり、スンナ派であった。オスマン帝国のムスリムは他に少数派のシーア派も存在し、イスラーム社会のオスマン帝国ではスンナ派、シーア派共にムスリムは帝国内の他のどの宗教よりも優遇されていた。

ムスリムが絶対的に優位のオスマン帝国ではあるが、イスラーム以外の多くの宗教を持つ国であった。オスマン帝国の中でムスリムの次に多かったのはキリスト教徒であり、正教徒、カトリック、アルメニア教会派、マロン派、コプト教徒、ネストリウス派、プロテスタントをはじめ、ユダヤ教も存在し、実に様々な宗教、宗派を持つ帝国であった[3]。

非ムスリムの人々は居住地をもとにし、主に言語と宗教によって分けられ、それぞれ自治が許されていた。

1-2　オスマン帝国の非ムスリムの自治について

オスマン帝国では宗教的なアイデンティティと民族的なアイデンティティの両方が重なって個人のアイデンティティが出来上がっていた。オスマン帝国の様々な民族、言語集団出身の支配層は自らをオスマンに属する者という意味の「オスマンル」と呼び、民族としての出自よりもムスリムでありトルコ語を話し、オスマン的教養を身につけている事を重要とした[4]。

オスマン帝国の支配階層であるオスマンルはムスリム優位を原則としていたが、決められた税を納めれば異民族、多宗教の自治を認めた。様々な宗教を持つ、様々な民族が共存していくシステムがオスマン帝国には存在したのである。オスマン帝国の非ムスリムの臣民はミレットと呼ばれる宗教共同体に所属しており、ミレットにはギリシア正教徒、アルメニア教会派、ユダヤ教徒の３種類のミレットがあったとされ、各ミレットにはミレット・バシュ（宗教共同体の長）が定められ、正教会とアルメニア教会派はそれぞれのイスタンブールの総主教が、ユダヤ教はイスタンブールのハハム・バシュ（ユダヤ教会の長）がその職務に就いた。各ミレットの属する者は貢納の義務を果たすかわりに、各ミレット・バシュの下で固有の信仰と法と生活習慣をも守りつつ、自主生活を営むことが許されていたとされている[5]。

様々な民族が民族的アイデンティティと宗教的アイデンティティの両方から個人のアイデンティティを形成し、とりわけ宗教を大切にしていたオスマン帝国の統治においては、現在のような激しい紛争はほとんど見られず、それぞれの宗教を尊重し、自治を認めるイスラーム教の考え方が基となって成り立っていた。このようにオスマン帝国は固有の信仰と、法と生活習慣を保ち、自治が許され、様々な民族や文化が共存していた国であった。

1-3　オスマン帝国の衰退と近代化

オスマン帝国は、10 代スレイマン１世（在位 1520 年-1566 年）の時代に最盛期を迎えるが、

その後無能なスルタンが続き内乱などで国力は衰えていった。

とりわけ、近世になると支配者の無能と相俟って、オスマン帝国の統治体制自体の問題になった。オスマン帝国の内部では先ほども述べたようにそれぞれの民族の固有の信仰が守られ、固有の言語が使われていたので、オスマン帝国の国民としての意識はそれほど高くなく、西洋から「国民国家」、「民族国家」の思想が入ってくると統治は大いに危ういものとなった。

「瀕死の病人」と称されるまで国力が疲弊し、危機的状態にあったオスマン帝国を 28 代スルタンのセリム３世（在位 1789 年-1807 年）は西洋の近代化を取り入れることで改善を企てた。しかし、努力も虚しく、キリスト教のナショナリズム、クリミア戦争、露土戦争、青年トルコ革命、など内外に問題を抱え、第一次世界大戦での敗戦により国土の大半をイギリスやフランスに占領され、スルタンは列強に従うばかりだった。これに危機感を持ったムスタファ・ケマル[6]らによりトルコ革命が断行され、オスマン帝国に代わりトルコ共和国が生まれた。

オスマン帝国の衰退期は、トルコで発掘されるローマ帝国時代やビザンツ帝国時代の考古資料や美術品が大量に密輸されるという文化面での侵略も起こっていた。これは長らく行われてきたことだが、考古遺物や美術品の密輸の事実があってもオスマン帝国は効果的な防止対策が出来なかった[7]。

1-4　近代化と博物館計画

トルコにおいて博物館への意識が生まれたとされる年代は諸説ある。トルコ政府が公にしているオスマン帝国が古代の品の収集をはじめた 1846 年とする説が有力である。一般的であるのは、トプカプ宮殿の外庭にあるアヤイリニ[8]に収集されていた武器や貴重品を展示し、公開した 1723 年とする説、もう一つは「コレクション」という用語が「ミュージアム」に直結するという論が認知され、博物館への関心が高まったとされる 1869 年を博物館への意識が生まれた年とする説である[9]。1846 年も 1723 年も博物館の要件として重要な「コレクション」への意識のはじまり、展示と公開の試みの始まりの年であるが、近代的な博物館という観念で見ると疑問を持たざるを得ない。1846 年は収集を大々的に始めた年で 1723 年から行われた武器の展示は教育的なものではなく、帝国の権威を見せつけるものである種の見世物のようなものであった。しかし、この二つの年代はオスマン帝国でコレクションが形成されていたということを示すものであり、1869 年の「コレクション」という用語が「ミュージアム」に直結するということから博物館への関心が高まったとされる説を後押しするものとも考えることができる。

これらの説はいずれも一般的な国民が近代的な博物館を意識した年とされているが、オスマン帝国の支配階級は度々ヨーロッパを訪ねており、32 代スルタンのアブデュルアズィズは 1867 年のパリ万国博覧会を視察するという目的でヨーロッパを歴訪している。このアブデュルアズィズの視察には帝国博物館が設立された時のスルタンであるアブデュルハミトも同行しておりヨーロッパの博物館を見物した[10]。このパリ万国博覧会の視察を経て、次に行われるウィーン万国博覧会に出展することを決めており、このウィーン万国博覧会が国内に博物館を作る大きなきっかけになったと考えられる。これは収集・保存・調査・研究・展示・教育・レクリェーションなどに

わたり広く市民に開放された恒久的な施設としての博物館[11]、つまり「近代博物館」をトルコに造るきっかけになった出来事であると思われるが、先ほども述べたが、収集した物を展示する試みはウィーン万国博覧会以前に行われている。

トプカプ宮殿の第一庭園にあるアヤイリニは 1453 年にメフメット２世によってコンスタンティノープルが征服された際、教会から武器庫に変えられた。トプカプ宮殿の第一庭園にはアヤイリニの他に宮殿用のパンや菓子を作る場所、火薬庫、医務局などがあり[12]広く一般の人々に公開され、重要な取り決めを人々に知らせるための広報の場という役割を持っていた[13]。

そのような場所で、武器庫として帝国の戦利品や数々の武器を集めた一大コレクションができていったのである。そして、1723 年にアヤイリニの内部の少しの改装の後、展示された。多くの人がアヤイリニに展示された武器などを見たと推定される。この展示は帝国の威信を示す施設ではあったが、これを博物館として直接考えることは難しい。

集めたものを国の威信を示すため展示するという一方的なものではなく、収集・保存・調査・研究・展示・教育・レクリエーションなどを備える博物館の建設は、オスマン帝国の支配階級のヨーロッパへ歴訪から始まった。パリ万国博覧会の視察をしたアブデュルアズィズ、アブデュルハミト２世が国に帰り、ヨーロッパの国々で見たような博物館をオスマン帝国にも造る計画が持ち上がった[14]。アブデュルアズィズ以降のスルタンは西洋に倣った近代化に力を入れており、博物館の計画も近代化へ向けた政策の一つであったと窺える。

パリやウィーンの視察を経て、博物館建設の計画を練るうちに、今までアヤイリニで行われてきた、武器の展示ではなく、自分たちの歴史や文化を広く一般の人に感じてもらうことのできる考古資料を展示することになった。元々考古資料は 1846 年から収集されており、ある程度のコレクションが存在したが、それらを展示して公開することはしておらず、集めたものはトプカプ宮殿の庭にあるチニリ・キョシュク[15]に雑然と置かれていた。そこで、そのコレクションを利用し、ヨーロッパの博物館でスルタンが見学した風景をオスマン帝国の博物館でも行おうとした様子である。この考古遺物のコレクションを展示する博物館を建設する背景には、次々に国外に密輸される考古資料を国内に留める目的があった。

博物館は政治の中枢がドルマバフチェ宮殿に移って使われなくなっていたトプカプ宮殿の外庭に造られ、一般に公開されたのは 1891 年 6 月 13 日のことだった。

２．帝国博物館建設責任者オスマン・ハムディ

2-1　オスマン・ハムディ

西洋に倣った博物館建設の計画ができ、陸軍元帥のアフマド・パシャによる考古資料の収集がある程度進み数が増えると、博物館建設の計画を実行に移すことになった。このオスマン帝国が西洋に習った博物館を建設する際に責任者に任じたのがオスマン・ハムディ・ベイ（Osman Hamdi Bey）である。オスマン・ハムディは名前でベイ(Bey)はトルコ語で「～さん」と男性を尊称する語である。

オスマン・ハムディは1842年にオスマン帝国の大宰相イブラヒム・パシャ（Ibrahim Edhem Pasha）の長男として生まれている[16]。14歳になった1856年にはイスタンブールの学校で法律の勉強をしており、18歳になる1860年には法律の勉強を更に深めるためにパリへ留学している。実際に西洋の近代化を目の当たりにし、パリで法律や絵画、考古学など様々なことを学び、1869年にイスタンブールに戻った。イスタンブールに帰るとさっそくミドハド・パシャ（Midhat Pasha）らとともにバクダットへタンジマート[17]を推し進めるために行き、弱体化したオスマン帝国を立て直すべく西洋化や近代化を導入、定着させようと努力した。

図1　Osman Hamdi Bey

バクダットでの仕事のほかにも役人として主に外交面での大使など様々な仕事をしたようだが[18]、博物館の責任者へとつながる仕事は1873年オスマン帝国のウィーン万国博覧会出展のために働いたことに始まった。ウィーン万国博覧会への出展は1867年のパリ万国博覧会に出展したコーヒーハウスや邸宅などの成功を受けたもので[19]、パリ万国博覧会の展示よりも規模を拡大しオスマン帝国の様子をより一層伝えることを目指していた。そのウィーン万国博覧会の出展にオスマン・ハムディは父親であるイブラヒム・パシャの推薦により派遣された。オスマン・ハムディは建物の立面図を作成し、伝統的な建築の秘技を紹介し、スルタンの領土の広さを主張し、帝国の歴史的な衣装の写真を集めて披露している[20]。ウィーン万国博覧会の出展によりオスマン・ハムディは初めて帝国内の帝国を代表するコレクションを把握することになった。また、オスマン帝国自体を展示する機会を得て、オスマン帝国のアイデンティティを考えることができたのである。これは後の博物館建設を行うにあたりなくてはならない経験であった。

ウィーン万国博覧会からは主に外国に応対する業務を任され、1877年にはスルタン・アブデュルアズィスからイスタンブールにあるトルコ語以外の言葉を話し、それぞれの信仰を守っている６つの自治体の管理を任されている[21]。これらの他言語・他民族・他宗教の自治体を管理するなかで、オスマン帝国の多様性を再確認したはずであるし、他言語・他民族・他宗教の人もオスマン帝国の国民であり、彼らをどのようにまとめるか、彼らとの共通項を再考したはずである。

そして、1877年に教育関係の官僚らの中で博物館の委員会を編成し、博物館を造るべく活動を始め1881年9月11日に帝国博物館建設の責任者に任命される。帝国博物館の建設責任者に任命されてからは博物館関係の仕事を生涯にわたっておこなうようになった。

2-2　画家としての実績と美術学校の創設

オスマン・ハムディは法律の勉強をするために1860年にパリに留学するが、絵画に魅了され

絵を学ぶようになり、パリの画塾に入り、オリエンタリズムの画家ジョン・レオン・ジェローム（Jean-Léon Gérôme）とギュスターヴ・ブーランジェ（Gustave Boulanger）の指導を受けた。この二人のもとで力をつけていき、1867年にはパリ万国博覧会に3点の絵を出品するまでになった[22]。イスタンブールに戻り、役人として働いている間も絵を描き続けた。

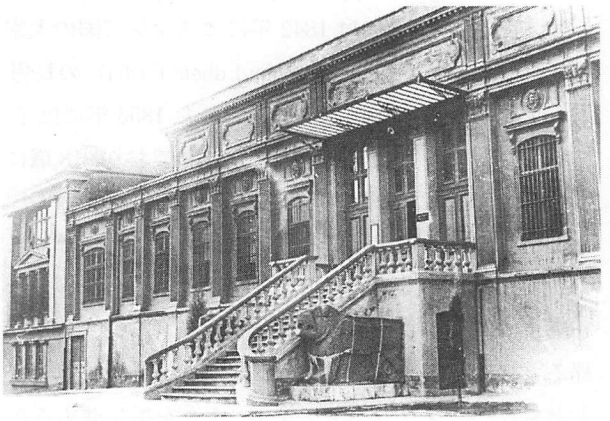

図2　帝国美術学校

オスマン・ハムディの絵は当時のオスマン帝国では珍しい西洋風のもので、絵のモチーフも景色や男性など当時よく描かれたモチーフのほかに仕事をしたり歩いたり、本を読んだりする女性を描いた。これは当時としては大変珍しいことであり、絵画の世界でも西洋を取り入れるきっかけを作った。

西洋的な絵画や西洋の先進的な建築をオスマン帝国に浸透させるために帝国美術学校(Sanayi-i Nefise Mekteb-i Alisi)を1882年に開校する。画塾に入って絵画を勉強した経験を踏まえ、オスマン・ハムディが責任者となった。この帝国美術学校には絵画や彫刻、芸術のコースが用意されており、他にも数学や解剖、歴史や書道なども教えられた。開校当時の生徒は男性ばかりが20人で、この学校を出た人物は画家や建築家になった者の他に、この後の博物館を担う人物となる物もいた[23]。帝国美術学校の建物は当時考古美術品が集められていたチニリ・キョシュクの庭を挟んで隣に建てられた。授業の中ではチニリ・キョシュクにある考古美術が絵のモチーフに使われることもあったようで、1891年に帝国博物館が開館するとこちらに展示されたものも美術や彫刻の参考にされた。

この帝国美術学校はオスマン・ハムディが亡くなった後は弟のハリル(Halil Edhem Eldem)が責任者になり、1914年に女性のために美術が学べる学校を開校した[24]。その後装飾を専門にするコースが新たに加えられ、学校の機能の移転や再編があり、現在はミマール・シナン芸術大学と名を変え、現在も美術系の大学として画家や彫刻家や建築家などを輩出し続けている。

2-3　古美術品を保護する法律の改正

芸術学校を作ると、以前から危惧していた貴重な考古資料の国外への流出を止めるため、文化財を保護、規制する法律（ASAR-I ATİKA NİZAMNAMESİ）の編纂に努めた。元々文化財を保護する法律は1874年に制定されていたが、この法律は古美術品などの文化財の概念自体がはっきりしておらず、国内に浸透せず、法律の制定後もヨーロッパの考古学者によって依然多くのものが発掘され持ち出されていた。持ち出されたものの例としては、現在、ドイツのペルガモン博物館に収められているものなどがある。そもそもペルガモンの考古資料は1867年に調査、1871年に発掘がはじめられ、1880年には大祭壇が発掘された。それらのものは1881年から1886年の間に鉄

道などを使いドイツへ運ばれた。オスマン・ハムディは1882年よりドイツの博物館のアレクサンダー・コンツェ(Alexander Conze)に再三手紙を出し、返還要請をしている[25]が、その願いは叶えられることはなかった。

このような事例の反省から1884年にオスマン・ハムディの手によって考古遺物など文化財の密輸を取り締まる法律が改正された。1874年の法律は帝国博物館建設の構想ができる中、文化財に関する最初の法律が諸外国に宣言される形で広められた。内容は非常に簡単なもので、帝国博物館を作るのでそこに物を集める事、発掘した物を国外に持ち出さないようにという呼びかけにすぎなかった。法的拘束力が強くなかったので、外国人が地権者の許可を得て発掘し、それを自国に持って帰ることがしばしばだった。

内容について少し検討すると、遺物の所有権は地権者3分の1、国が3分の1、見つけた人3分の1とし、遺物の分類はコインとその他すべてという二つの括りしかなかった。
加えて、外国に持ち出す場合に利用されるであろう交通機関や車などへの監視が行き届いていなかった。帝国博物館建設のため遺物を集めると宣言したものの、周知徹底がされていなかったようである[26]。

この1874年の法律の失敗としては、遺物の所有権を3分の1ずつ分けたので、所有権が分散したことがあり、更に大きな理由として遺物の分類をコインとその他すべてと大雑把にしたことがある。考古学が浸透していなかった1874年当時のオスマン帝国では遺物の価値がわからない地権者も多く、「コインとその他」では「その他」に該当するものがどんなものかわからず、自分の持つ土地から石像や棺が出ても、もともとそれがあって当たり前のような環境にずっと生活してきた人たちにとっては、それが価値のある物かよくわからず、発見者に説得され持ち去られることがよくあった。また、法を破った場合の制裁措置や監視が行き届いておらず、法律が作られる前と変わらず多くの密輸がされた。「発掘された遺物は帝国博物館へ」という意識の徹底がされていなかった面にも問題がある。

1874年の法律の失敗を教訓に1884年に帝国博物館建設責任者になったオスマン・ハムディが法律を改正する。遺物の所有権は地権者3分の1、国が3分の1、見つけた人3分の1と以前と変わっていないが、外国人が発掘者の場合その遺物を移動させる際には国、地権者、領事館の許可が必要になった。遺物の分類は金、銀、コイン、歴史的な記述がみられるもの、壁画、石や粘土で作られた容器、武器、道具、偶像、指輪、寺や宮殿、競技場、要塞、橋、水道橋、オベリスク、死体、彫刻されたもの、墓、他記念的なものなど大きなものから小さなものまで細かく分類され規定された監視も以前鉄道で遺跡ごと持って行かれた経験からか、交通機関や車などへの監視が厳しくなった。川や海など他国との領域やあいまいな部分についても明文化され、[27]どこにどのような遺跡があるのか調査され、国内で発掘されたものは帝国博物館へ集められるようになる。

1884年の法律が作られた後は、遺跡の近くに小さな地方博物館が作られ、発掘された遺物はまず地方博物館に収蔵され、そこから貴重なものはイスタンブールの帝国博物館に収蔵された。こ

うして、法律が整備され、国内で発掘されたものは帝国博物館へ集められる仕組みが整った。

2-4　考古学的発掘とコレクションの充実

オスマン・ハムディが帝国博物館建設の責任者に任命された頃、1846年より集められていた考古遺物は650点程になっていた。更にコレクションを充実させる為に、また、貴重な遺跡の出土品を海外に持っていかれるよりも早く発掘する為に発掘が急がれたが、当時オスマン帝国に考古学者と呼ばれる人物はおらず、考古学という学問は浸透していなかった。オスマン・ハムディはパリで絵を勉強する際、考古学についても学んでいたことから、自ら発掘に赴き、多くの遺物を帝国博物館に持ち帰っている。トルコに考古学という意識を持ちこんだのはオスマン・ハムディだと言える。

現在のイスタンブール考古学博物館の目玉となるアレクサンダー大王の石棺をはじめとする展示品は1887年に見つかった。オスマン帝国支配下にあったレバノンのシドンで井戸掘りをしていた村人が偶然見つけたというシドンの王家の墓は２つの地下墓所があり一つは盗掘されほとんど残っていなかったが、もう一つは湿気や雨漏りからも守られ完全な状態で出土した[28]。この石棺類の発見により当時公開されていたチニリ・キョシュクでは手狭であるので新しい建物を作る必要が生じた。チニリ・キョシュクの正面に建設された新館はシドンの王家の墓から出土した「嘆き悲しむ女性たちの石棺」を参考に設計された[29]。

シドンの王家の石棺群のほかに帝国内のトロイ、エフェソス、ペルガモン、トラキア、ミレトスなどの各地の出土品を蒐集し、オスマン帝国領内に栄えた歴史的な都市や文明の資料をおおよそ網羅するコレクションが出来上がった。このコレクションは石棺や石像が多かったが、土器や粘土板などの資料も多数あり、特に粘土板のコレクションは石棺と並ぶ帝国博物館のコレクションとなった。

当時発掘された考古遺物はイスタンブールのトプカプ宮殿の敷地内にあるチニリ・キョシュクに集められていたが、展示という展示はされておらず、石棺の上に石像の首が置かれているように、ただ雑然と積み重ねられていた。チニリ・キョシュクで博物館の展示をしようとしても展示すべきコレクションに対して場所が狭すぎて、満足な展示は出来そうもなかった。そこで、充分に展示ができ、公開できる建物を建設することになった。これを指揮したのも帝国博物館建設の責任者のオスマン・ハムディであり、建物の建設は実質の近代博物館誕生に繋がる事業であった。

2-5　帝国博物館の開館

発掘された考古資料を主に展示し、現在のトルコがどのような歴史的な土台の上に成り立つのかということを示す展示方針を基に、ついに建物の建設に取り組むことになる。建物はトプカプ宮殿の外庭で、今まで発掘された考古資料を雑然と置いていたチニリ・キョシュクの前に建てられた。

建物の形は博物館の収蔵品の目玉であるアレクサンドロス大王の石棺と嘆く女達の石棺の装飾からヒントを得ており、博物館として建てられた建物の中ではかなり古い部類に属する。この建物が出来上がるとオスマン・ハムディが発掘した石棺などとチニリ・キョシュクにあった考古

資料は帝国博物館に収められ、分類され、展示された。石棺は石棺、石像は石像でまとめ、貴重なものには容易に手を触れられないように柵を設け、来館者が休める椅子も少しであるが置かれていた。新しくできた建物に発掘されたものの多くは展示されたが、新しくできた建物だけに博物館の機能を集め、チニリ・キョシュクの利用を終えたわけではなく、チニリ・キョシュクでも並行して展示が行われた。そうして、1891年6月13日に一般に公開される。

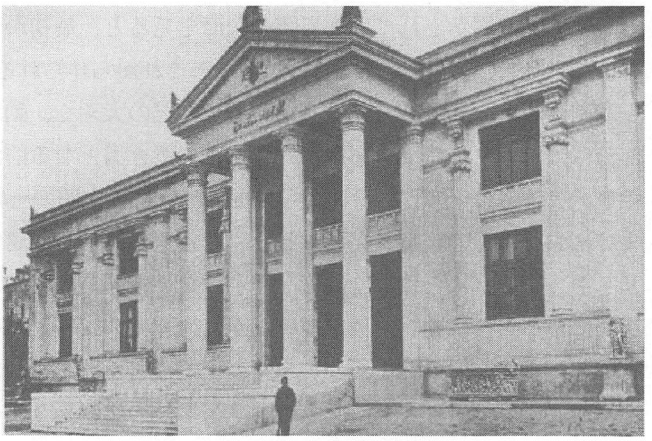

図3　開館当時の帝国博物館

かつてオスマン帝国で行われてきた雑然とした、見せるだけの展示ではなく、利用者の立場にたった、わかりやすい分類の展示と、考古資料を集め、自らの国をわかってもらおうという明瞭なコンセプトは一般市民に自分の国を再認識する場所になったととらえることができる。こうして、帝国博物館は西洋に倣った近代博物館の骨格を持った博物館として開館された。

3．帝国博物館の成立後

3-1　博物館の発展

帝国博物館は1891年6月13日に開館した。当然ではあるが、開館したら完成というわけではなく、その後に手を加えられ続けている。1891年に開館した後も博物館に収集された考古遺物を展示するために、また、これから増えていく新しく発掘された遺物を収蔵するために開館後も建物の増築が度々行われている。1891年の開館当時は石柱が立ち並ぶ入口部分から右と左に広い部屋が一室ずつあるだけだったが、1908年には最初からある建物につながった入口がもう一つ作られ、一直線だった建物がコの字型になり、一階だけでも13室ある大きな建物になった[30]。現在帝国博物館はイスタンブール考古学博物館と名前を変えてい

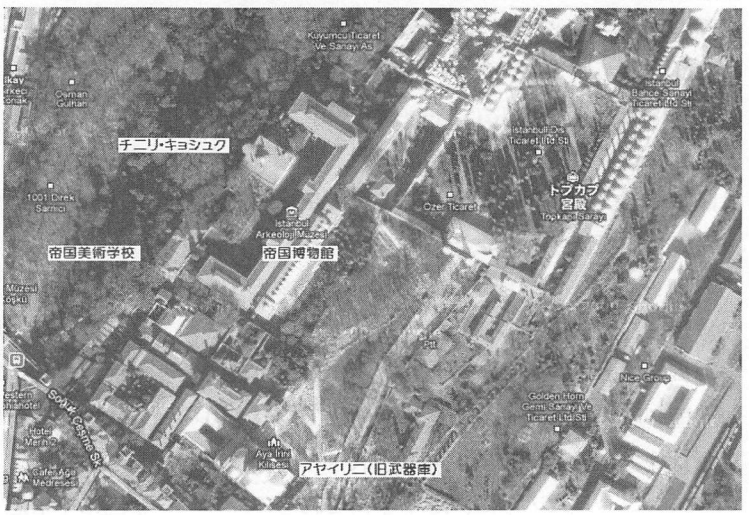

図4　現在の帝国博物館（イスタンブール考古学博物館）

るが、そこに展示されていた当時の図面を見ると、最初から増築をして大きな建物を建てる予定でいたようで、最初にできた建物の両端にこれから作られる建物と接続する入口が存在している。

開館当時は、一階部分には石棺や石像などの大きく、動かす事が困難なものが展示され、二階部分にはチニリ・キョシュクが考古遺物の置き場となる前からあったイスラームの装飾タイルや絵皿、宗教用具やアナトリアから発掘された古代文明の土器や粘土板などが展示された。1908年までにおおよその増築が完了すると、考古遺物は新しい建物に、イスラームの工芸品などはチニリ・キョシュクにと建物で収蔵品を別けた。帝国美術学校が大学の編成で美術学校の機能が他の場所に移った後は建物だけが残ったが、このかつて帝国美術学校であった建物にも展示が行われ、ここでは古代文明の粘土板やタイル、土器などが展示された。

本館、チニリ・キョシュク、帝国美術学校の建物と3館の大規模な博物館になったが、収蔵品の増加により1908年からある建物だけでは収蔵しきれなくなり、コの字型の本館の後ろ側にさらに増築がされるようになった。1908年までの増築は計画の上での増築であったが、それ以降の増築はオスマン・ハムディが考えた博物館の増築計画とは異なり、完全に後の博物館を運営する人物が考えた増築であった。

この博物館はトルコで一番初めに近代的な博物館として開館したその歴史からか、こども博物館などの外国で提唱される先進的なものを国内でもいち早く取り入れ、展示を構成している。

3-2 博物館の効果

帝国博物館の展示は、石棺なら石棺、石像なら石像と種類別で分けられ、さらに出土地やそれに応じた時代別に展示された。この時代別・出土地別に展示するということは帝国博物館の展示のテーマを「オスマン帝国の歴史」ではなく、「オスマン帝国が治める土地の歴史」としたということである。これはこの博物館の大きな意味である。

1章で述べたように、様々な民族や文明が統治した移り変わりの激しい土地であったオスマン帝国の領地にはイスラームの教えのもとで異教徒、異民族が自治を与えられて生活していた。オスマン帝国が栄えていた16世紀や17世紀はムスリム優位ではあるが、自治が認められ、固有の生活が保障され、さらには国の中枢を担う人材が非ムスリムの中からのみ排出される制度があり、安定して統治がされていたが、18世紀あたりから国の中枢はムスリムの子弟が占め、重要な役職は賄賂で手に入れるようになるとオスマン帝国の統治自体に不信感が芽生えた。帝国内はトルコ人ばかりが優遇され、生活しやすくなり、非ムスリムの国民は生活しづらい環境になった。

18世紀以降のオスマン帝国への不信が募っていった時期に、西洋で生まれつつあった「政治的民族意識」、「政治的国民意識」がオスマン帝国の非ムスリムの諸民族にも芽生え始めた(31)。今までのムスリム、非ムスリムとしての分け方だけで、どんな民族で宗教であっても変わらずオスマン帝国の国民であるという意識が薄れ、それぞれの民族に国家をという考えが深まっていった。これはオスマン帝国を内から崩す大きな問題であった。

オスマン・ハムディは、1877年にこれらのオスマン帝国に不信感を持ち民族意識や国民意識を持ち始めた非ムスリムを管理する仕事をしている。そして、同じ年に教育を主にする官僚たちの

間で博物館の委員会を立ち上げている。この委員会についての詳細な文献は当たることができなかったので、今後の課題にしたいが、おそらくこの委員会で教育的な立場からもう一度非ムスリムの意識を「オスマン帝国の国民」に戻すことはできないかと考えられただろう。

宗教的にも民族的にも言語的にも共通点のないムスリムと非ムスリムだったが、「オスマン帝国の国民」として唯一の共通点が同じ土地に暮らしていることであった。オスマン帝国が治める土地の歴史を先史時代からオスマン帝国に至るまで、かつてあった国の民族、宗教に関係なく、オスマン帝国の土地の歴史とし、その土地に住む人間はムスリムであろうとなかろうと同じ歴史を持つ国民であり、郷土に愛を持つようにというオスマン帝国なりのナショナリズムが西洋の民族意識や国民意識の強いナショナリズムに対抗して提唱された。このオスマン帝国なりのナショナリズムはムスリムと非ムスリムの立場が同じであればうまくいった可能性があるが、ムスリム優位という立場は変わらなかった為、非ムスリムの反発をうけ失敗する(32)。

帝国博物館はこれらのナショナリズムの考え方も取り入れ「オスマン帝国が治める土地の歴史」を考古遺物で表す展示内容で開館した。帝国の歴史に対する考え方を博物館の展示として表したのである。オスマン帝国のナショナリズム自体は失敗に終わったが、帝国内のムスリムも非ムスリムも自分たちの住む土地の歴史を展示物を通して知ることのできる博物館の開館は大きな意義を持った。

開館当時はちょうどエルトゥールル号の遭難があった時期で、日本とトルコの外交が盛んになった時期であり、多くの日本人がトルコに行っており、それぞれ文章を残している。オスマン帝国の人間ではない、観光や仕事でイスタンブールを見学し博物館へ足を運んだ日本人の目にはどのように見えていただろうか。

1909年にイスタンブールに行った立作太郎はトルコに独自の文化が存在するのかと疑問を持ち、帝国博物館に訪れているが、展示を見てオスマン帝国の文化はビザンツ帝国やキリスト教などからの借り物ばかりで博物館に行ってもギリシヤやローマのものばかりと失望した様子である(33)。立は博物館の展示が石棺や石像などギリシヤやローマのものばかりで、オスマン帝国としてもトルコの歴史が展示されていないため「この国に独自の文化はあるのか」と疑念を抱いているようで、オスマン帝国を知るために博物館に行った人がオスマン帝国を知るという展示ではなかった事がうかがえる。

立とは異なる感想を述べているのが黒板勝美である。黒板は チニリ・キョシュクから新館への移行期に見学しており、著書「西遊二年欧米文明記」の中で石棺や石像の展示からオスマン帝国の治める土地の歴史を重要なものと考え、小アジアなどの古代の遺跡から出土したものの考古美術としての価値を認め、彫刻の技法から文明の経路などに思いをはせている。黒板は帝国博物館の展示をオスマン帝国の歴史とは捉えず、オスマン帝国の土地の歴史と捉えてその広がりに感動している(39)。

この二人の感想から考えられることとして、立のように博物館にオスマン帝国やトルコ人の文化や歴史を見に行けば、求めるものの展示がされておらず、帝国博物館なのに他の国の文化や歴

史を展示しているように感じるだろう。しかし、オスマン帝国の土地の歴史を見るものとしては、各地の遺跡から資料が集められ、おおよそ帝国の土地の歴史を網羅した内容だったようだ。

3-3　オスマン帝国の博物館とトルコ共和国の博物館

オスマン帝国は多民族の国であったが、オスマン帝国にとってかわったトルコ共和国は「トルコ人」の国家である。「トルコ人」という考え方は非常にあいまいなものでトルコ語を話すのであれば民族はあまり関係がなかった[40]。つまり、トルコ共和国を形作っているトルコ人は様々な民族のトルコ語を話す人であり、古代からの共通の歴史の認識はなかった。トルコ人としてのナショナリズムが盛んに議論されるようになると、トルコ人という概念をどこに求めればいいのか、トルコ人の基盤はどこにあるのかという問いかけが生まれた。この問いの答えはやはり、遊牧民族や狩猟民族のトルコ人や他の民族が集まり国になった土地の歴史であった。

このことから、トルコの土地の歴史を展示していた帝国博物館は、オスマン帝国が倒れトルコ共和国になった後も展示内容はそのままで運営された。これは帝国博物館の展示がトルコ共和国の歴史認識に合致していたことを表している。しかし、内容は同じでも土地の歴史に対する考え方に少しの違いがある。「帝国」の博物館の展示は帝国にいる多くの民族や宗教集団、言語集団も皆オスマン帝国の国民であり、それぞれの民族が持つ歴史はオスマン帝国の土地の歴史と一歩引いた立場からではあるが、帝国につながる歴史と考えられるのに対し、「共和国」の博物館の展示はより客観的にトルコの土地の歴史を捉えている。

おわりに

トルコの博物館にとって、オスマン・ハムディ・ベイの行った美術学校での画家や建築家などの美術界や博物館などで活躍する人材の育成や、文化財を保護する法律の整備、発掘を始めとした考古学を浸透させる活動などは博物館建設を後押しするものとなり、オスマン・ハムディ・ベイの業績はトルコの博物館を語る上でなくてはならないものである。帝国博物館が完成した後は古代遺物の国外持ち出しは殆どなくなり、都市ごとに博物館が作られ発掘された貴重な遺物が収蔵された。

様々な民族や国が治めたトルコの土地は多くの歴史があるだけでなく、現在も多くの民族が居住する土地である。トルコで最初の近代博物館である帝国博物館は現在もイスタンブール考古学博物館と名前を変えて、建設当時から変わらない場所に建っている。オスマン帝国が倒れた後、トルコ共和国になっても変わらず運営された帝国博物館はケマル・アタテュルクの政策で次々にできる博物館の一つの手本になった。帝国博物館がトルコ共和国でも存在出来た理由はオスマン帝国がこの博物館をオスマン帝国の歴史の博物館ではなく、トルコの土地の歴史を展示する博物館にしたことである。博物館での象徴的なオスマンナショナリズムの展示はオスマン帝国政府の思惑からすると失敗したが、永く残る博物館としては正しい判断だったのではないだろうか。

註

(1) テレーズ・タビール著　鈴木董監修　富樫瓔子訳 1995 『オスマン帝国の栄光』創元社 23-24 頁

(2) イスラームを信奉する人のことを指す。

(3) 鈴木董 2000『オスマン帝国の解体』ちくま新書 135-137 頁

(4) 林佳世子 1997『オスマン帝国の時代』山川出版社,　29 頁

(5) 註 3 と同じ 142-146 頁

(6) のちのケマル・アタチュルク。

(7) Wendy M. K. Shaw.2003 'Possessors and Possessed –museums, archaeology, and the Visualization of History in the Late Ottoman Empire' California,University of California press,p.89.

(8) トプカプ宮殿の外庭にある、ビザンツ帝国時代 6 世紀に建てられたキリスト教の教会。ハギア（聖）イレーネ教会ともいう。メフメット 2 世がコンスタンティノープルを征服した際に協会としての機能を失い、武器庫になった。

(9) Wendy M. K. Shaw, op. cit., p.31.

(10) Wendy M. K. Shaw, op. cit., pp.83-88.

(11) 矢島國雄 1986「近代博物館と古代における博物館の前史」『museologist』1 号 明治大学学芸員養成課程 17 頁

(12) サバハッティン・テュルクオール 2007『トプカプ』NETTURiSTiK　YAYINLAR　A. Ş.　Istanbil 13 頁

(13) 鈴木董（監修）2007「オスマン帝国の歴史と文化」『トプカプ宮殿の至宝展~オスマン帝国と時代を彩った女性たち~』図録 朝日新聞社 東映 24 頁

(14) Wendy M. K. Shaw, op. cit., pp.83-88.

(15) タイルの離れという意味を持つ建物で 1427 年スルタン・メフメット 2 世によって建設された。現在イスタンブール考古学博物館の中の装飾タイル博物館になっている。

(16) イスタンブール国立考古学博物館のオスマン・ハムディの展示パネルを参考にした。

(17) タンジマートとはバルカン半島でナショナリズムが進む中、帝国内を安定させようと行った 1839 年から 1876 年にかけて行われた改革である。恩恵改革という意味を持ち、西洋近代の市民社会の理念を取り入れようとしたもの。

(18) AdolpheThalasso,2008 'OSMANLISANAYTI-Türkiye'ninRessamları-' MASMATBAACILIK , Istanbul..p.37.

(19) Wendy M. K. Shaw, op. cit.,p.141.

(20) Wendy M. K. Shaw, op. cit.,p.99.

(21) イスタンブール国立考古学博物館のオスマン・ハムディの展示パネルより。

(22) Wendy M. K. Shaw, op. cit.,p.98.

(23) MIMAR SINAN FINE ART UNIVERSITY History http://www.msgsu.edu.tr/msu/Pages/450.aspx.

(2010年1月検索)

(24) Turkish Museum of Architecture
http://www.archmuseum.org/Gallery/Photo_12_1_sanayii-nefise-mektebi-school-of-fine-arts.html#(2010年1月検索)

(25) Wendy M. K. Shaw, op. cit., pp.108-109.

(26) Wendy M. K. Shaw, op. cit., pp.108-109.

(27) Brouwn, G. B. 1905 'The Care of Ancient Monuments. Turkish Monument Legislation' p.216,pp 222-224.

(28) アルパイパシンリ 1995『イスタンブル考古学博物館』A Turizm Yayinlari Istanbul 69頁

(29) 註28に同じ 6頁

(30) Wendy M. K. Shaw , op. cit.,pp.161-169.

(31) 鈴木董 1997「多様性と開放性の帝国-オスマン帝国」『帝国とは何か』岩波書店 178-179頁

(32) 酒井啓子編 1993『国家・民俗・アイデンティティー-アラブ社会の国民形成』アジア経済研究所 245-273頁

(33) 中近東文化センター付属博物館 2007『エルトゥールル号回顧展』中近東文化センター付属博物館 66-67頁

(34) 黒板勝美 1911『西遊二年 欧米文明記』文会堂 354-355頁

(35) 山口昭彦 2005「現代トルコの国民統合と市民権」『イスラーム地域の国家とナショナリズム』東京大学出版会 239-243頁

図

(1) GerekliGereksiz http://gerekligereksiz.blogspot.com/2007/11/osman-hamdi-bey.html より。

(2)Turkish Museumd of Architecture
http://www.archmuseum.org/Gallery/1883-1928-school-of-fine-arts-_12.html より。

(3) Wendy M. K. Shaw,Possessors and Possessed -museums, archaeology, and the Visualization of History in the Late Ottoman Empire, California,University of California press,2003, p.158.より

(4)Google マップ Istanbul
http://maps.google.co.jp/maps?sourceid=navclient&hl=ja&rlz=1T4TSHJ_jaJP275JP275&q=istanbul&um=1&ie=UTF-8&sa=N&tab=wl (2010年1月検索)